

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第71号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)4月16日 月曜日

2018年(平成30年)4月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜する。また放置されている縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。



1300年後の黄金の国・ジパングを東北から 今後東北復興をリードする考え方 連載企画④【東北先史時代学】

日本初の産金は宮城 県の小さな町だった

筆者の生まれ故郷は宮城県北部にある古くて小さな城下町の涌谷町である。過疎化が進行しつつある普通の町、どこにもあるような田舎の町である。

しかし、この町は何度か日本史に登場する。その最初が「日本初の産金」であった。

天平二十一年(七百四十九年)、奈良東大寺の大仏の鍍金用に金が足りなかつたところに、タイミンゴよく、この地から日本で最初に金を産出し、なんとか大仏開眼供養に間に合ったのである。

当時、金は高価な輸入品であり、かつ、大仏の鍍金には大量の金が必要であり、その調達に聖武天皇は苦勞していた。

その産出の金の量は九百両、重量にして13.5キログラム。

この国内初の産金産出を天皇は大層喜び、天平感宝と

百済王敬福

このときの陸奥守は百済王敬福(くだらのこにきしきょうふく)であった。

彼は百済の義慈王の王子禅広(ぜんこう)の末であり、百済が滅亡した時、我が日本に帰化した禅広の曾孫にあたる。したがって百済王族の子孫である。

しかし、この場所だけで九百両もの黄金を採取することは難しいのではないかという見方もある。

当時は、宮城県の北部辺りの線が蝦夷(えみし)たちの居住区との境界線であり、蝦夷たちも比較的平和に共存していた頃であったので、機を見るに敏な敬福は中央の状況を耳にする

と、急遽、蝦夷たちと交易して黄金を買い集め、効果を上げるために大量に貢上したのではないかと考えられているようだ。

歴史上では、この時をもって我が国で産金が始

まったとされているが、東北の奥地では蝦夷たちによって、それ以前から黄金が採取されていたに違いないという見方も存在する。

また、現在と異なり、金という金属はお金としては流通しておらず、仏像の鍍金としての使い道以外になかったため、蝦夷たちも金をそれほど日常的な価値あるものとも思っていないかつたとの見方もある。

ともかく、敬福はこの功績により、従五位上から従三位へ七階級特進するという快挙を達成し、大出世を果たし、また産金に貢献した他の関係者も併せて大昇進を遂げた。

外国人鉦山技師

採金技術は、当時、日本と交流のあった朝鮮半島からもたらされたとする見方が有力である。

七世紀後半、百済が滅亡したときに日本に逃れてきた渡来人がもたらした先進技術のひとつと考えられている。

そうした見方を裏付けるように、当時の涌谷町、いにしへの小田郡の渡来系の採金技術者の四人のうち、実に三人が百済系であったのである。

こうした渡来系の採金技術者が活躍した天平の時代は国際色豊かな時代だったようだが、東北の田舎町にまで外国人がいた風景はまことに興味深いものがある。

大和朝廷の前線基地

涌谷町の国内初の産金の時代には、後のアテルイの時代とは異なり、まだ大和政権と蝦夷の間には大きな緊張関係はなかつたようだが、それでもこの近辺は、大和朝廷と蝦夷の支配の交錯する地帯であり、また双方の文化も入り乱れて存在していたにちがいない。

当時の大和朝廷の軍事面においては、鎮守府(ちんじゅふ)という陸奥国に置かれた古代日本における軍政を司る役所があった。その長官である將軍の名が天平元年(七百二十九年)に初めて見えることから、奈良時代前半には鎮守府相当の機関が東国のいずれかの地に設置されたものと推測されている。

また、鎮守府の前身は「鎮所(ちんじょ)」であり、陸奥国府があったとされる多賀城付近に併設されていたものと推測されている。

したがって張り詰めた緊張状態にはなかつたとはいえず、そうした軍隊が配置さ



涌谷を起点とした三陸金山マップ



金持上げ模擬体験、900両 = 13.5kg



天平ろまん館 涌谷と東大寺

れており、また、アテルイと大和朝廷との間の長期に亘る戦闘の時代からわずかな数十年前のことであった。

三陸の金山と平泉

金の話に戻るが、涌谷産出の金は砂金であった。金鉱脈から金鉱石を掘り出し、精錬するのではなく、小川に流れてくる砂金を採集する手法であった。

この金は、北上山地に埋もれていた金が、滝や小川を下って涌谷町に流れ来たものであり、かなりの高純度であった。

したがって、砂金も金鉱石も涌谷に限ったものではなく、北上山地を取り囲んだ地域周辺にある金山や小川からも金を産出してきた

し、金にちなむ地域もたくさんある。宮城県ではまず、今般の大震災で被災した南三陸町の「田東山経塚群」がある。

この田東山は、黄金伝説のある平泉の奥州藤原氏の藤原秀衡が深く信心していたと伝えられる山であり、大切な仏教経典を未来に残そうという経塚信仰の拠点であった。

気仙沼市の「大谷鉱山跡」については、周辺地域における金の産出は前九年の役以前までさかのぼり、平泉の黄金文化を支えたと伝えられている。

同じく奥州藤原氏の都・平泉の黄金文化を支えたとも伝えられる金山跡「鹿折金山跡」もある。

さらに、岩手県陸前高田市にあり、奈良時代から産金が始まったと伝えられ、奥州藤原氏の黄金文化を支えた気仙地方の代表的な金山の「玉山金山跡」もある。

最後は、金色に輝く金色堂で有名な奥州平泉である。このように、北上山地周辺には金にまつわる地域が密集している。

東京オリンピックの金メダルに東北の金を！

2020年東京オリンピックを目前に控えて、こうした東北の金にまつわる地域が結束して、オリンピックの金メダルに、いまでも産出する金を使おうという運動が起きている。いままではすっかり忘れ去

られたような東北の金の歴史を想起するためにも、また、東北復興、三陸復興に弾みをつけるためにも有効ではないかと思う。

都市鉱山である電子機器類から金属を精錬してメダルと作るという運動も起きているようだが、ぜひ金メダルに東北産出の金を使って欲しいと思う。

黄金の国・ジパングよ、ふたたび

かつて日本は「黄金の国・ジパング」として世界的に名が知れ渡っていた。十三世紀から十四世紀ごろに書かれたと思われる、マルコ・ポーロによる「東方見聞録」には、「ジパングは、カタイ(中国大陸)

の東の海上1500マイルに位置する独立した島国であり、莫大な金を産出すること、また、王の宮殿は金でできており」とある。

この黄金の国伝説は、まさにこの東北に源があり、なかでも、この小さな城下町である涌谷町にそのルーツがあることはまことに誇らしいことと思うのである。

黄金伝説を、2020年の東京オリンピックを契機に、再び世界に発信するというのはどうだろうか。

そしてその伝説の明らかなき証として、北上山地を取り囲む諸地域産の金を使用するというのであれば、どれだけインパクトがあるか計り知れない。

そうすれば、否が応でも東北の復興に注目が集まることとなる。

東北復興や黄金伝説再来を前面に押し出すとかが、オリンピックを東北復興に利用しすぎとの批判もあるかもしれないが、もともとこの東京オリンピックはあの震災からの復興をアピールすることも大きな目的のひとつであったはずである。けっして、とってつけたような話でもないと思う。

古代東北の歴史遺産

さらに、黄金伝説だけではなく、オリンピックで来

日する外国人及び東北を観光する日本人向けに、東北各地にある多くの古代歴史遺産を紹介するというのはどうだろうか。

まずはたくさん縄文遺跡がある。旧石器時代遺跡もある。

千三百年後の東北復活

東北の近代、近世、中世を眺めると、被支配と被侵略と被略奪の歴史しか思い浮かばない。

そのことは非常に残念なことではあるが、いつまでもそこにこだわってはいけません。東北の復活は永遠に訪れることはないだろう。いまから千三百年前という、気の遠くなるような時間を遡れば、被支配と被侵略と被略奪の歴史以前の東北が出現する。

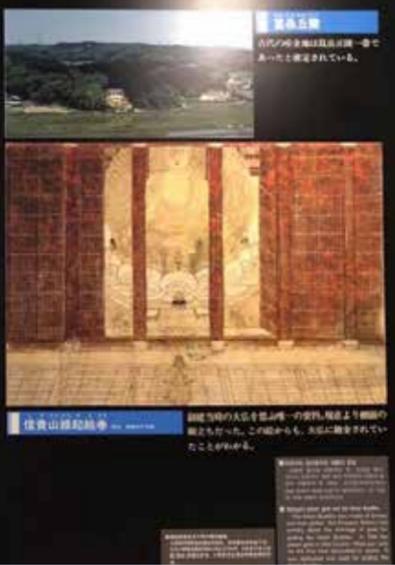
その時代に戻って、復興を実現する。そのためにオリンピックを活用するというのはどうだろうか。こうした意味において、古代、いや先史時代の歴史発掘は東北復興の大きな起点となりうると思うのである。

涌谷の産金と大仏の完成

東大寺の大仏は、銅による鑄造後鑄造する金銅像である。大仏建立で最大の問題は、この鑄金用の金だった。なぜなら当時金はすべて輸入品で、膨大な量の金を手に入れる見込みはまったくなかったからである。

金の不足で大仏の完成が危ぶまれていた。天平21(749)年、陸奥国守百濟王敬福が、小田郡産出の黄金(砂金)900兩(13kg)を献上した。このことに、天皇は宣命を降して大いに喜び、年号を「天平」から「天平勝宝」へと変えたほどであった。また、越中国守大伴家持はこの初産金を祝して歌を詠み万葉集に残している。

大仏はこの黄金(砂金)によって無事完成の見込みがたち、天平勝宝4(752)年、盛大な大仏開眼の供養式が催された。



涌谷の産金と大仏の完成

産金に貢献した人々

採金技術は、当時日本との交流が深く、砂金採取の盛んだった朝鮮半島からもたらされた可能性が高い。百濟が7世紀後半、新羅と唐の連合軍に滅ぼされた時、日本に逃れた多くの渡来人ももたらした先進技術のひとつに、採金技術もあったのではないだろうか。

それを裏付けるかのように、小田郡での採金者の中に、渡来系の人物が4人(うち3人までが百濟系)も確認されている。小田郡の採金者のような渡来系の人々の活躍は、まさに国際色豊かだった天平時代を象徴するかのようである。



産金に貢献した人々

百濟王敬福

小田郡での採金を指揮したのは陸奥国守百濟王敬福であった。彼は、その他が示すように、百濟王族の子孫である。百濟が滅亡したとき日本に逃れてきた王族に、天皇が「百濟王」の姓を与えたのである。

敬福は「続日本紀」によると「性慾は奔放で酒色を好み、聖武天皇に気に入られていた。貴い人には、他人から借りてでも物を与えたり、財産が貯まらなかった。しかし、理解力があり、有能だった」とある。百濟王族は、敬福以外にも多くの有能な人物がいたことで知られ、大阪府枚方市に残る百濟王族の氏神・百濟王神社や氏寺・百濟寺にその栄華を偲ぶことができる。

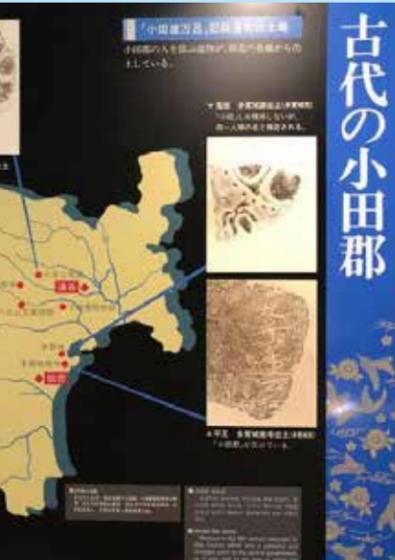


百濟王敬福

古代の小田郡

8世紀頃の涌谷を中心とした地域は、「小田郡」という郡に属していた。小田郡は宮城県北東部諸郡の中心であった。小田郡には陸奥国の律令制軍団の一つ、小田軍団が置かれていた。これは軍事教練の施設で、有力な郡に置かれるのが常だった。

また8世紀前半の重要な遺跡に、砂金を産出した「黄金山産金遺跡」や、銅産出を産した「長根遺跡」、銅産出と瓦を産した「六郎館遺跡」等がある。ここで作られた瓦の供給先はまだ明らかになっていないが、おそらく、この遺跡の施設と推定される。陸奥国の生産基盤を支えた有力な郡としての小田郡がここに浮かび上がってくる。



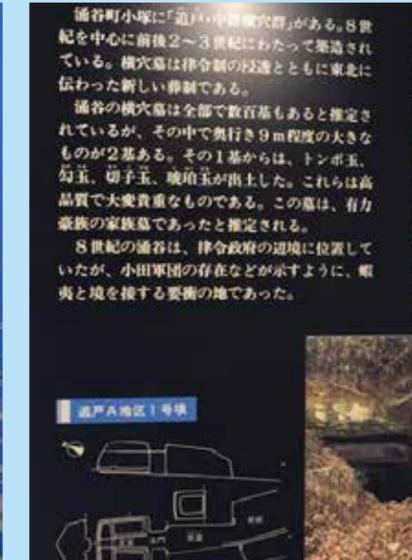
古代の小田郡

横穴墓と豪族

涌谷町小塚に「道」(中興横穴墓)がある。8世紀を中心として前後2〜3世紀にわたって築造されている。横穴墓は律令制の浸透とともに東北に伝わった新しい葬制である。

涌谷の横穴墓は全部で数百基もあると推定されているが、その中で奥行き9m程度の大きなものが2基ある。その1基からは、トンボ玉、菊玉、硝子玉、琥珀玉が出土した。これらは高品質で大変貴重なものである。この墓は、有力豪族の家族墓であったと推定される。

8世紀の涌谷は、律令政府の遺境に位置していたが、小田軍団の存在などが示すように、蝦夷と境を接する要衝の地であった。



横穴墓と豪族



東北地酒ラインアップ

第三十二回の三陸酒海鮮会は三月二十四日、いつもの会場である渋谷の焚火家で開催されました。今回は比較的少人数で始まりましたが、途中から若手の「参入」があつて、突然に超盛大な会に変貌を遂げました。

それだけでなく、ミニミニコンサートもあつて、さらに盛り上がりました。三時間の長時間でも吐き出せなかったエネルギーは二次会で発散しました。次回はゴールデンウィーク明けの五月十九日の開催です。

若手多数の盛大な三陸酒海鮮会

(第32回) 2018.3.24 (土)
於：渋谷焚火家

次回はGW明けの
2018.5.19



第44回

水産業再興のための料理レシピ紹介 いまが旬の《カレイの煮付け》

今カレイが旬を迎えたようで市場に出回ってます。今回は黒カレイですが、2枚で298円、こちらは1/4切り。安いですね。浜でも釣れてると思います。

(松本談)



完成品



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 カレイ 2枚 醤油 80g、みりん 30CC、ザラメ 3g、砂糖 5g、水 250CC 付け合わせ：大根 80g、ホーレン草 50g

【作り方】

- ① 鍋に水と調味料を煮たて、カレイを入れます。(カレイは背に切れ目を入れて火の通りをよくします)
- ② 煮たったら、煮汁をカレイにかけて煮含めます
- ③ 煮汁に大根も一緒に入れて煮ます。(中火)
- ④ 煮汁を残して、火を止めます。
- ⑤ カレイを器に盛り、大根、茹でたほうれん草を添えて飾ります。



写真でお伝えする 東北の風景（春めいた海と鹿）

写真撮影：尾崎匠



ホップとビールで まちを盛り上げる!

減り続ける

国内産ホップ

ビールに欠かせない原料の一つにホップがある。世界最古の食品関連の法律とされるドイツの「ビール純粋令」には、「ビールは大麥、ホップ、水、酵母のみを原料とすべし」とあるが、逆に言えばビールづくりはこの4つは欠かせないものであると見ることもできる。

このうち、ホップは、ビールの苦みと香りをつけるのに欠かせない原料である。このホップについては、以前書いたことがあるが、国内では東北地方のシェアが極めて高い。東北では宮城と福島を除く4県でホップが栽培されており、2011年時点で、国内産ホップに占める東北産ホップのシェアは98.9%と圧倒的である。最近では、クラフトビール市場が拡大するにつれて、他地域でも栽培が始まっているが、それでも昨年時点で約

96%が東北産と聞いているので、いまだに日本でホップと言えば東北、という状況が続いている。

しかし、大きな問題がある。シェアは依然として高いものの、生産量は年々減少してきているのである。国内全体で見ると、ホップの生産量が過去最大だったのは1968年の3,295トンだが、これが2011年時点で330トンと、実に10分の1にまで減少している。東北の中でも最大のホップ生産県は国内産ホップのうち5割の生産量を誇る岩手だが、その岩手を見ても、平成に入ってから、1989年に647トンだった生産量は、2016年には101トンにまで落ち込んでいる。その理由は生産者の高齢化と後継者不足で、そのために生産者が減少し、栽培面積も減少するという状況に陥っているのである。栽培戸数を見ても、1989

年に538戸だったのが、2016年には何と79戸にまで減少しているのである。東北の他県でも概ね同じような状況であり、この状況が続くと、近いうちに東北産ホップを使ったビールが飲めなくなるという大いなる懸念がある。

キリンビールによる地域活性化への取り組み

こうした現状に危機感を募らせている企業がある。キリンビールである。実は、国内産ホップのうちのおよそ70%をキリンが購入している。キリンビールは岩手の中でも最大の生産量である遠野を始め、江刺、秋田県の大館周辺、大雄、山形県南など、東北各地に契約栽培地を持っている。サツポロビールやアサヒビールも東北で契約栽培を行っているが、その購入量はキリンビールに遠く及ばない。

このキリンビールが、CSV活動の一環として、国内産ホップの価値化に取り組み始めた。具体的な取り組みの一つとして、ホップの契約栽培を通じておよそ50年の付き合いがある岩手県遠野市とコラボレーションして、共同で地域活性化に取り組んでいる。遠野市とキリンビール、遠野ホップ農業協同組合などが「TK(遠野・キリン)プロジェクト」を立ち上げ、「ホップの里」から「ビールの里」へを合言葉に、単なるホップの栽培地からホップを核とし

たまちづくりを進めているのである。具体的には、毎年夏に「遠野ホップ収穫祭」を開催すると共に、ホップの収穫体験や農家への民泊体験などを含めた「遠野ビアツーリズム」の実施、「フレッシユ・ホップ・フェスト」というその年に取れたホップを使って造ったビールの解禁を祝うイベントの開催、親子を対象とした「遠野ホップ畑生きもの観察会」の開催など、ホップをキーワードとした交流人口を増やすための様々な取り組みを行っている。同様の取り組みは、やはりホップの契約栽培を行っている秋田県横手市でも行われている。

東北産ホップの利用拡大に向けた動き

実は、東北のクラフトビール各社が東北産のホップを使用するようになったのは、ごく最近のことである。先述の通り、国内では圧倒的なシェアを持つ東北産ホップだが、そのほとんどがキリンビールメーカーの契約栽培によるものであり、当然納入先はそれら大手メーカーである。同じ地元にあるとは言え、東北のクラフトビール各社は、自社栽培するなどごく一部の例外を除けばこの東北産ホップを自由に使うことはできなかったのである。

それが大きく変わったのは昨年4月、キリンビールが国内のクラフトビール各社を対象に契約栽培の東北産ホップ「BUKI」を供給することに踏み切ったからである。それまで東北産のホップを使ったビールといえば、毎年秋にキリンビールやアサヒビールが発売する限定ビールで味わう以外なかったが、これによって東北産のホップを使った東北のクラフトビールが飲めるようになったのである。キリンビールが国内産ホップを使用する割合は、キ

リンビールが使用する全ホップのうちの約9%だという。全体から見ればごくわずかとも言える割合だが、それでもキリンビールが国内産ホップを支援する理由について、「BUKI BREWERS MEETING」ではキリンビールの担当者からは「国内産のホップの品質は素晴らしい」、「国内産ホップでしか味わえないビールがある」、「国内産ホップを通じて日本のビール文化をもっと面白くしたい」といった話があった。

ビールに発泡酒、「第三のビール」を加えたビール系飲料の出荷量は昨年まで13年連続で減少しており、昨年は過去最低を更新している。その一方で、2009年まで年間1500Lほどでほとんど増減がなかったクラフトビールの出荷量は、その後年々増加に転じ、2014年には2684Lとそれまでのおよそ1.8倍にもなっている。こうした状況を踏まえて、大手各社もクラフトビールの醸造に相次いで参入してきているが、中でも特に意欲的なのがキリンビールである。先述のスプリングバレーブルワリーの立ち上げ以外にも、クラフトビール最大手と見られる「よなよなエール」で知られるヤッホーブルイニングと業務・資本提携をするなど、クラフトビールへの関与を強めている。昨年11月には東北のクラフトビ

東北各地で始まっているビールとホップによる地域活性化

昨年仙台には「穀町ビール」ができ、秋田県羽後町には「羽後麦酒」ができた。「穀町ビール」を造る今野さんにも、「羽後麦酒」を造る齋藤さんにも話を聞いたことがあるが、いずれも自分たちの地域の活性化を強く意識していた。今野さんは「ぜひ仙台に来て飲んでほしい」ということで市内の飲食店には卸して、地元密着でビールづくりと販売を進めている。齋藤さんは地元で採れたイチゴやブルーベリー、そして食用菊などを使ったビールづくりを積極的に進めている。件の遠野市にも、昨年秋に「遠野醸造」が立ち上がった。既に醸造を始め、今月中にも地元産のホップを

使ってビールを造るブルーパブ(醸造設備のあるビアパブ)をオープンさせることである。それ以外にも今年、私が知る限り、宮城県内に2箇所、福島県内に1箇所、新たにブルーパブが立ち上がる予定である。いずれも「ビールで自分たちの地域を盛り上げていきたい」と志す人たちが立ち上げており、今後がとも楽しみである。

以前、埼玉に行った折に、さいたま市で初のクラフトビール「氷川ブリュワリー」併設のビア「氷川の杜」に行ってみた。ちょうど創業者の菊池さんがおられて、いろいろと話が聞けたが、そこでも仙台同様クラフトビールがなかった。さいたま市に初めてつくるといって、その意義についていろいろと考えたそうだが、その結果、「ビールを通じて人と人をつなぐ」、「地域への愛着を深めてもらう」、「地域づくりに貢献する」といったことを重視したいということになった。この考えは、東北各地でビールに携わっている多くの人にも共通する姿勢である。

ホップそのものの栽培も広がるようになっている。宮城県石巻市では「イシノマキファーム」がホップ栽培を始めた。昨年収穫したホップはいわて蔵ビールに醸造を委託してクラフトビール「石巻日和」として石巻市内で販売された。今年2月に

は、地元のゆずを使った第2弾となるビールを発売した。「羽後麦酒」もそうだが、地元産原料の使用というのも今後の東北のクラフトビールを考える上で、一つの重要なキーワードとなるに違いない。最近では以前の「地ビール」という言葉よりも「クラフトビール」という言葉の方が、各地に生まれた小規模のビール醸造所で造られたビールを表現するのに一般的な用語となりつつあるが、恐らく今後「地ビール」は、地元産の原材料を用いて造られたその土地ならではのビールを表す言葉として使われていくようになるのではないかと考える。

また、福島県田村市では「ホップジャパン」が地元農家とタイアップしてホップ栽培を始めた。地元で作ったホップを使ったクラフトビールを醸造し、ホップ栽培の6次産業化を目指すという。醸造所は早ければ今年秋、遅くとも来年春には開業するとのことだ。こちらも楽しみである。宮城と福島という、現在ではホップ栽培が途絶えていた地域でこうした動きが相次いで起きていくことは大変興味深い。

普段ビールを飲む際にホップのことはあまり意識しないが、ビールの苦みも香りも大部分はホップに依っている。このホップに着目した地域づくりが今、東北のあちこちで始まっているのである。今後のさらなる展開に大いに期待したい。

執筆者紹介

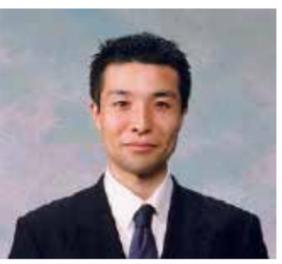
大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブローグ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



「東日本」の中の東北の事

半年ほど前、本誌六十五号にて拙稿で紹介した『庄内藩幕末秘話』(宇田川敬介著)が何でも二〇一六年に政府が発表した明治維新一五〇周年記念事業の一環として映画化が進められているという話を最近になって知った。明治一五〇周年、といえば戊辰戦争では仙台藩士の曾祖父が戦に身を投じたという歴史家・星亮一氏の最新作『東北を置き去りにした明治維新』で「何が一五〇周年記念か。長州出身の安倍首相が喜んでるだけではないか。」と明確に非難されていたのが印象的である。氏は更に出版記念講演などでも「会津は奥羽同盟の仲間だ



奥羽越境現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

の対談によって実現したとしてよく知られる「江戸無血開城」である。西郷が総攻撃を目指し夥しい住民が戦火に巻き込まれようとした江戸が全く無傷のまま救われた事は確かに快挙であつたが、これにより新政府軍の収まらぬ破壊欲と征服欲の矛先が他ならぬ東北方面へ向けられていった事実から、「無血」という二文字がどうしても空しく響いてしまうのは筆者だけではないだろうと思う。

記録が残っている訳だが、当の慶喜は決して凡愚でも臆病でもなく、幼少より家康の再来と呼ばれる程の英邁振りであり知られていた。武士たるもの、名譽を重んじて負けるわけがわかっていても戦う姿こそ美しい。・と誰しもが思うが、現実的に上立つ者は自分だけが武名を遺して済むものではない。背負うべき国、守るべき人民を滅ぼしかねない責任があるからだ。そう考えれば、泰衡と慶喜はともに做うべき先例のない難しい判断を迫られていたと言えるだろう。

松平容保は藩祖・保科正之以来の家訓「徳川將軍家への絶対の忠義」を重視し、慶喜はその実直さに付け込み、利用したのである。鳥羽・伏見の戦いでは薩長の策略にて掲げられた「錦の御旗」に動揺、朝敵となるのを恐れ大軍を捨てて江戸へ逃げ帰る。その後の政局は幕臣・勝海舟に一任して蟄居、自らが矢面に立たせた会津を救う行動すら見せる事なく沈黙を貫いた。

力の巻き返し合いの繰り返しのようなものである。遠く昔は西の朝廷・東の將門の戦い、続いては西の平家に東の源氏の戦い、そして戦国の世でも関が原にて西軍と東軍が雌雄を巡り、とどめは幕末にきて東と西の逆転劇である。日本の歴史の流れを知る者は誰でもこの東西に長い列島における、一方で常に単一民族を標榜しながらも不可避的に続けられてきた東側と西側の宿命的な軋轢の構造を認識するであろう。しかし、実際には東の先に更に大きく発展して伸びる東北という方角が、この東西の戦いの歴史に必ず深く関わってきた事も忘れてはならない。

伊達・上杉ら奥羽の勢力が徳川に味方した事で、一応その臣下として認められ所領も安堵された形とはなつたが、それが即、奥羽の勝利を意味しなかつたのは明白である。蝦夷として大地を駆けていた時代、そして平泉藤原氏が治めていた時代のような、奥羽の風土に合った政治も農業も復活はせず、度重なる冷害と飢饉に多くの民を失い、参勤交代や蝦夷地警備などのこの時代独特の制度が、奥羽全体の疲弊を招く事になる。薩長にとっては東の「徳川一味」として一緒にいた

けての地方を「東国」、それより北東を「陸奥」と呼び区別されていたが、近代になると電力や電話、鉄道などの管轄事情から従来の地域区分に一致しない例が少なからず発生する。東北地方でいえば、東北電力の管轄に新潟県も含まれる例、そして国鉄事業を引き継いだJRの東北営業が東日本エリアに統括される例である。電力に関しては周波数や各会社規模などの事情があるとされ、鉄道の場合は首都圏と東北間の直通路線の多さの他、東北だけでは採算が取れぬと予想された為、売上の見込める関東地区と合わせバランを取つたものと言われる。ここで出現した「東日本」という括りはしかし、東北の人々の心にどのような感情を抱かせるだろうか。東北だけではやっていけないので中央に統合されるという鉄道の事情は、東北の自立性という観点から見ると著しく自尊心を傷つけられる象徴的な話かも知れない。東北独立の主張が空しく響く要因でもある「リ

ダーの不在」は東北に頭部がない事を意味し、結局東京・中央というブレインなしでは身動き一つできないという現状を暗喩するといつては穿ち過ぎか。確かに、長い間中央にながらる事は東北人にとって望ましいステータスであり、一種の安心感すら伴っていたかも知れない。しかし、中央という頭を頂いて、身体のもりになっていたら、徳川慶喜がそうしようとしたようにまた東北は利用され尽くした挙句にある日見捨てられる可能性が、もはやないとはい切れるだろうか。明治以来の西主導の政権が未だ続いていると書いたが、東京一極集中の現在、もはや西も東もわからない。これから先、日本の歴史で勢力を巻き返す出番があるとすれば、それは西でも東でもない。思いがけない様な地域が、立ち上がってくるかも知れないのだ。いつか、東北が「東日本」である事をやめる日が来るだろうか。東北が立ち上がる時であれば、まさにその時である、と私は思う。

大和ドラマといえどもに明治維新一五〇周年の関連とも思われる今年の『西郷どん』だが、主人公・西郷隆盛や後の宿敵・一橋慶喜を見ていてあらためて思うところもあつたので過去のネタを蒸し返すようで恐縮ながら、また別視点からこの時代と東北を考えてみたい。

明治維新という近代日本にとっての一大変革期において最も偉大な事績と言われるのが、西郷と勝海舟

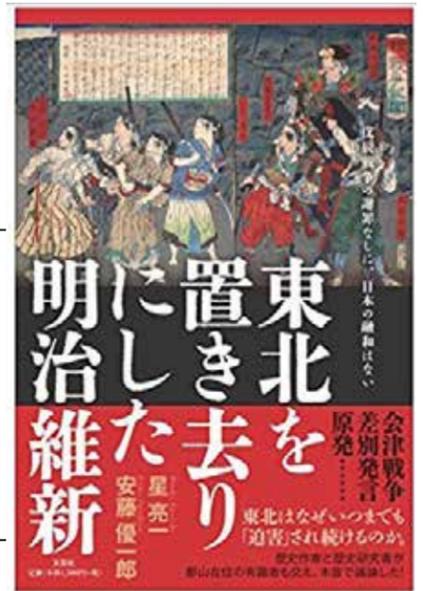
鎌倉の時代から、東北が中央の直接支配を受ける形は続いているが、決定的なのが徳川家康による江戸開府であつた。東北と隣接する東国に巨大な中央政府が置かれた事で、今度こそ東北は「京から遠く離れた半独立地帯」から「中央政府の一翼」へと変わつてしまつたのである。つまり東北が関東と一体である、という現在まで続く「東日本」という概念の始まりでもあつたのかも知れない。

だが慶喜は徹底的に地元では無い、遠く地方の家臣に頼つた。奥州会津藩主・

戸の延長―東日本の一部―とても捉えられているように思われてならない。倒幕と明治維新によって二六〇年に渡る東の支配に対する復讐を果した西主導の政権は現代まで未だ続いているとも言われているが、では江戸が栄えた徳川時代には奥羽・東北もまた華の時代だつたのだろうか。

東北地方でいえば、東北電力の管轄に新潟県も含まれる例、そして国鉄事業を引き継いだJRの東北営業が東日本エリアに統括される例である。電力に関しては周波数や各会社規模などの事情があるとされ、鉄道の場合は首都圏と東北間の直通路線の多さの他、東北だけでは採算が取れぬと予想された為、売上の見込める関東地区と合わせバランを取つたものと言われる。ここで出現した「東日本」という括りはしかし、東北の人々の心にどのような感情を抱かせるだろうか。東北だけではやっていけないので中央に統合されるという鉄道の事情は、東北の自立性という観点から見ると著しく自尊心を傷つけられる象徴的な話かも知れない。東北独立の主張が空しく響く要因でもある「リ

『東北を置き去りにした明治維新』文芸社 2017年



明治維新という近代日本にとっての一大変革期において最も偉大な事績と言われるのが、西郷と勝海舟

鎌倉の時代から、東北が中央の直接支配を受ける形は続いているが、決定的なのが徳川家康による江戸開府であつた。東北と隣接する東国に巨大な中央政府が置かれた事で、今度こそ東北は「京から遠く離れた半独立地帯」から「中央政府の一翼」へと変わつてしまつたのである。つまり東北が関東と一体である、という現在まで続く「東日本」という概念の始まりでもあつたのかも知れない。

だが慶喜は徹底的に地元では無い、遠く地方の家臣に頼つた。奥州会津藩主・

戸の延長―東日本の一部―とても捉えられているように思われてならない。倒幕と明治維新によって二六〇年に渡る東の支配に対する復讐を果した西主導の政権は現代まで未だ続いているとも言われているが、では江戸が栄えた徳川時代には奥羽・東北もまた華の時代だつたのだろうか。

東北地方でいえば、東北電力の管轄に新潟県も含まれる例、そして国鉄事業を引き継いだJRの東北営業が東日本エリアに統括される例である。電力に関しては周波数や各会社規模などの事情があるとされ、鉄道の場合は首都圏と東北間の直通路線の多さの他、東北だけでは採算が取れぬと予想された為、売上の見込める関東地区と合わせバランを取つたものと言われる。ここで出現した「東日本」という括りはしかし、東北の人々の心にどのような感情を抱かせるだろうか。東北だけではやっていけないので中央に統合されるという鉄道の事情は、東北の自立性という観点から見ると著しく自尊心を傷つけられる象徴的な話かも知れない。東北独立の主張が空しく響く要因でもある「リ

『東北を置き去りにした明治維新』文芸社 2017年

『東北を置き去りにした明治維新』文芸社 2017年

シリーズ 遠野の自然
「遠野の清明」
遠野 1000 景より

四月に入り全国的に春が訪れた。東京などは春どころか一挙に夏日にもなり、少し厚着をしていると汗をかきような気温になった。最近のこうした急激な気温の変化には、何か地球規模で何らかの大きな変動が起きているのではないかと感じてしまう。

岩手の遠野にも春が来ているようだ。

白と黒の二色の世界から、たくさんの色彩が出現するのがこの季節である。

冬の間に降った雪は、雪解け水となって、滝となり小川となる。

梅はまだつぼみであるが、筆者としては桜よりも梅がいい。ユキワリソウの淡いピンクがまたいい。紫色のクロッカスは筆者が大好きな花である。キクザキイチゲには早速ミツバチが蜜を吸いに来ている。ギョウジャニンニクの芽も出てきた。フキノトウの変種なのか、形の変ったフキノトウが春の到来を告げている。



朝の清流



ウメのつぼみ



小さな滝



クロッカス



ギョウジャニンニク



ユキワリソウ



キクザキイチゲ



フキノトウの変種

東北先史時代学の実践プロジェクト② 長根貝塚保存活動開始 発掘計画あり、何が出現するか 横穴古墳群も未発掘状態

早速の行動開始

当新聞六十九号で取り上げた宮城県遠田郡涌谷町にある長根貝塚保存に関し、「東北先史時代学」の目的に沿った具体的な活動もしていきたくと考え、さっそく同好の士を募ったところ、ありがたいことに、三名の地元の方におつきあいいただくこととなった。

そして三月二十五日に、現地見学兼顔合わせのための日帰り強行ミニツアーが実現した。

いずれも考古学にかなりの造詣をお持ちの方々であり、そのうちの一人は専門家であった。まことに心強かった。

不思議なことに、筆者と



区画整理計画がある長根貝塚下の田んぼ

お三方は初対面で、お会いするまではどんな対面になるのかワクワクドキドキであった。

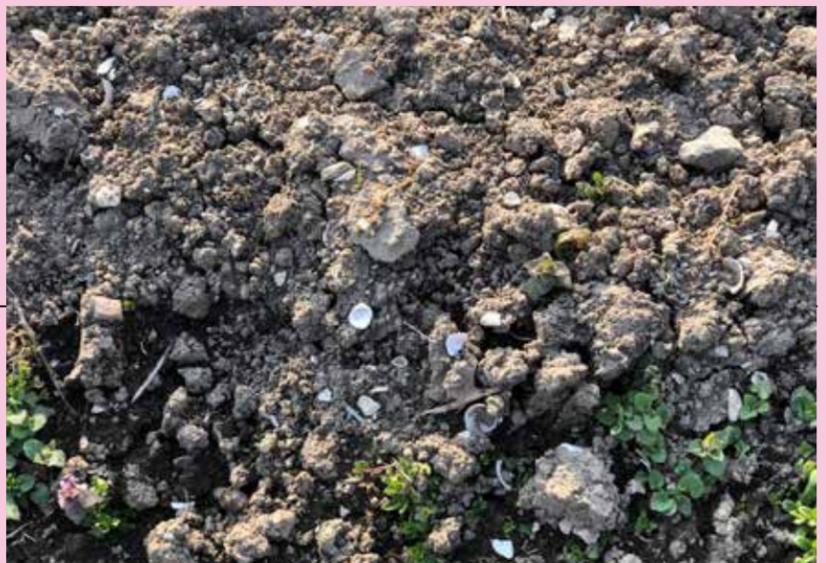
縦横無尽の考古談義

まずは、筆者の訪問目的を話し、長根貝塚への思いを披露した。

その後、縦横無尽の考古談義、涌谷談義となり、話は尽きることがなく、現地見学がなければ延々と続く気配であった。

長根貝塚の現況、今後の展開などについてお聞きするうちに、このまま貝塚の放置状態が続くのかと思ひ込んでいた筆者の考えが大きく変わっていった。

その場での新たな情報によれば、長根貝塚は単独の



貝塚表層の畑には当時の貝殻が散乱している

の逆転の考え方にも驚かされた。

最後は、小高い場所にある長根貝塚の前に広がる田んぼの大規模区画整理が予定されているという。

この区画整理のためにはかなりの深さまで田んぼを掘り起こすということであり、その深さは場所によっては二メートルにもなるという。いわば区画整理という発掘作業に転化するのだ。そうならば、例えば縄文

の時代に使用していた船の遺物が発見されるかもしれないし、思いもよらない遺物発見があるかもしれないということであった。

そうした発見があれば、いまはだれも訪れない貝塚にたくさんの観光客が訪れるだろうと夢想した。

ともかく、事前に資料を熟読していたので、そこで話された内容は素人の筆者にもよく理解できた。同時に、長根貝塚の未来についても多少楽観的な見通しが開けてきた。

解説してくれた専門家によれば、この長根貝塚群の全容を解明するには少なくともあと二百年は必要だと言われて、考古学の懐の深さも痛感した。

天平ろまん館

考古談義に無理やりひと段落つけて、現地見学となったが、最初は長根貝塚の前に、涌谷の金産出にまつわる展示館である天平ろまん館を見学しようというこ



畑を少し掘ると土器・貝殻・動物の骨の破片がたくさん出現する

とになった。詳細は一面と二面を参照いただきたい。

新たな発見もあったし、詳細な解説付きで、より深く学習できた。

また、近々、奈良の東大寺と金に関する企画展も予定されていて、さらに東北復興やオリンピックからみ

の展開もあり、また三陸のみならず岩手県平泉にまで及んでいる事実も判明し、非常に心強い思いがした。

小さいころに、この貝塚を訪れた知り合いは、ここで土器の破片をたくさん拾ったという話を思い出した。

長根貝塚と遺物の散逸

考古談義であらかじめ聞いていた話を現地を確認するとより一層現実味が増す。

近くの畑にはたくさんの貝殻が散乱していた。それらは二千年以上の縄文時代の貝塚の一部だが、無造

弥生遺跡と陶器工場跡

長根貝塚を後にして次の見学地に移動する際、未発掘の弥生遺跡があることを教えられた。まったくのつかずというところであった。



追戸横穴古墳群

歴史遺産放置の影響

今回の訪問であらためて思ったのは、予算不足の問題なのか、古代の歴史遺産が未発掘のまま放置されすぎたということである。

こうした放置された歴史がたくさん存在するということは、現代という時代までの長い時間が途中で寸断されるということであり、そこに生きている人々は、寸詰まりの歴史を生きているということなのではないかと感じたことである。

最後に追戸横穴古墳群

最後は、古墳時代の横穴古墳群の見学だった。

以前にも訪れていたが、今回は解説付きである点がいちばん異なる。

ここでも、未発掘の横穴古墳が一桁どころではなく、全容はまったく想像もつかないほど埋もれたままであると教えられた。

また、その近くには奈良時代以降、平安時代にかけての複数の陶器工場があったことも教えられた。放置されている古代遺跡は長根貝塚だけではないのだ。

新たな発見の驚きとともに、なぜこうした状況のままなのか、非常に残念な思いがした。

また畑の表面を少し掘るだけで、縄文土器の破片や動物の骨が出現する。これらについても同様の思いがした。

小さいころに、この貝塚を訪れた知り合いは、ここで土器の破片をたくさん拾ったという話を思い出した。

今回の訪問であらためて思ったのは、予算不足の問題なのか、古代の歴史遺産が未発掘のまま放置されすぎたということである。

こうした放置された歴史がたくさん存在するということは、現代という時代までの長い時間が途中で寸断されるということであり、そこに生きている人々は、寸詰まりの歴史を生きているということなのではないかと感じたことである。